怪力の御笠森九平（みかさもりきゅうへい）

多くの人々や文物の往来で栄えた筑紫野市山家（長崎街道・山家宿）には、江戸時代の影響が色濃く残っています。

毎年秋、鎮守の森、山家宝満宮で奉納される山家岩戸神楽（同市指定無形民俗文化財）も、江戸期の発祥とされています。同宮の社前には「大行事碑」が建てられています。かつては一の鳥居横の下宮境内にあったのを移設しました。その祭事として旧暦八朔（9月1日）には宮相撲が開かれました。現在では、子ども相撲だけが催されています。

“ムラ相撲”の伝統を物語る人物が、裏山の墓地に眠っている「御笠森九平」です。子孫にあたる満生家の話や旦那寺である山家西福寺の過去帳などによると、九平は1831年（天保2）に生まれ、1874年（明治7）7月4日、43歳で死去しています。大変な力持ちだったようで、戒名は「放龍」とされました。幕末、同じ街道の宿場町原田（同市原田）で相撲興行が開かれたとき、肥後藩（熊本）お抱えの力士「梅ヶ枝」を怪力で投げ飛ばしました。九平は肥後藩士たちの復讐を恐れて、裸のまま逃げ帰ったそうです。

▲御笠森九平の墓

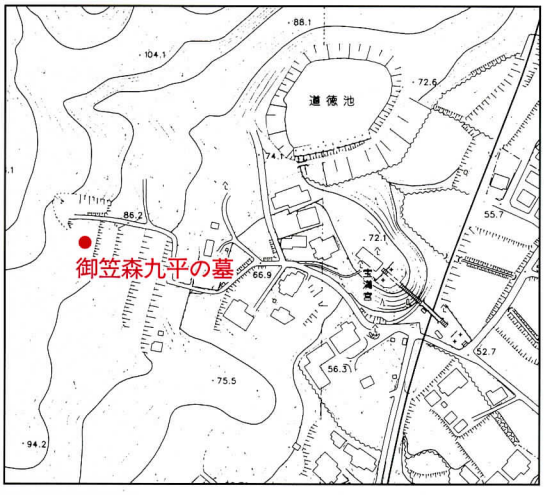
▲山家宝満宮の遠景

長崎に外国船が入港したときには、軍夫（軍隊の中で労務だけに雇われた人夫）として力仕事にあたりました。幕末から明治維新の激動にかけて生き抜いた男ですが、彼の相撲歴

を物語る資料は全く残っていません。宝満宮裏山の満生家一族の墓地の中で「御笠森九平」と筆太く刻まれた墓標は、高さ2.5m、幅1.3mの自然石で、うっそうとした樹林に苔蒸したまま立っています。百余基並んだ墓標の中でもひときわ目立つ存在です。大きな文字を刻むのに１文字が米１俵、計５俵を代金として支払ったと伝えられています。

九平の大墓石のそばにキリシタン墓とされる高さ50cmぐらいの石碑があります。満生家の由来書では「天正訪欧少年使節の一人、伊東マンショが帰国後、宗教弾圧を逃れて交通の便利なこの地に隠居し、寺院を建立して布教した」とあり、マンショ（満生）と音読されています。何故、ここに留まったのか、資料はありませんが、数年前、近くの住宅の改築工事で古い地下室らしい“遺構”が見つかりました。その地区名が小字普門寺、九平の墓地は小字道徳というのも宗教とのかかわりがありそうです。筑紫の地ではこうした宮相撲の長い伝統が、大相撲の人気を支えているといえるのではないでしょうか。

〈参考〉近藤思川著『筑前山家今昔』



▲原田駅（現ＪＲ）前での相撲大会（昭和初期）